



TITLE:

宋の惠民倉に就て

AUTHOR(S):

今堀, 誠二

---

CITATION:

今堀, 誠二. 宋の惠民倉に就て. 東洋史研究 1942, 7(2-3): 87-109

ISSUE DATE:

1942-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/138838>

RIGHT:

# 宋の惠民倉に就て

今堀誠二

## 目次

- 一 序説
- 二 北宋の惠民倉
- 三 南宋の惠民倉
- 四 惠民倉の性格

## 一 序説

惠民倉の歴史は淳化五年に始まる。この年法令を以て各州毎に作る事とされ、平時和糴によつて貯穀を行ひ、凶年に際會すれば貧民に對して安價に提供する様に定められた。咸平二年になつてその運営を地方政廳に一任され、同年福建省にも設立が許された。然し以後常平倉等の壓迫で概して不振であつたのである。

南宋に入ると一陽來復の感があつた。この時代には法令は一度も出なかつたが、南昌府・延平縣・蘄州・潭州・新定縣等々に於て、地方廳が自發的に設立して

行つた。殊に潭州では、最初眞德秀が古來益州で行はれて居た一種の社會政策等から暗示された計畫を發表し、次で曾從龍が州内の十二縣に十萬緡餘りの資本で實際に倉を設立し、後李少卿がその條約に追加を行つたり、余公が五十萬緡を以て質庫を併設し、その收入を長沙善化以外の十縣の倉の經濟補償にあてたり、其他難多な變遷を畫いて宋末に及んで居るのである。南宋の惠民倉は總じて年々春夏の候に於ける都市細民の難糴防止を使命として賑糴を行つて居る。

此等の實例で明らかな様に、惠民倉は都市に於ける貧民——極貧者を除き、又最も貧しい有産者を含む

——の救済の爲に、賑糶を行ふものであるが、然も他の條件は兩宋で非常に相違して居る。北宋に於ては官倉であり、法令によつて劃一的に作られたもので、殊に凶年時の救荒を目的として居るのに對し、南宋に於ては地方倉であり、各地方が自發的に起したもので、殊に毎年春夏に於て米價が騰貴する現象に對處して居るのである。此等の諸性格は皆それ／＼時代の要求に即應して居るわけであつて、相違點に就て言へばそれは北宋と南宋との社會事情の相違をそのまゝ露呈したものであると言へる。この様に、惠民倉は全く時代の生んだ發明なのであるが、それなりに制度的に缺陷もあり、社會的に見るならば、責任者たる官吏の腐敗、享益者たる貧人の無力、及他の人々の無關心など致命的な惡條件にとりまかれて居た爲に、いづれも使命を果さずに短命で終つたのである。

惠民倉に關する資料はごく斷片的にしか残つて居ない。その中にあつて曾我部靜雄氏は「宋代の三倉及びその他」〔東亞經濟研究第十三卷第四號〕に於てよく概述を行はれ、又鄧雲特氏は中國救荒史に於て大體は曾我部氏によりつゝも、なほ一二補足される所があつ

た。筆者が兩著に負ふ所少くないのであるが、何と言つても共に舊著に屬し、今日から見れば考究する餘地もないではない。永樂大典卷七五—三（以下永樂大典と略稱）中に、一二新史料を見出し得たのを機會として、敢て江湖の御叱正を仰ぐ事とした次第である。

## 二 北宋の惠民倉

永樂大典卷七五—三所收宋會要に

淳化五年十月令諸州惠民倉、故穀遇糶稱貴、則減價

糶與貧民人。不遇一斛。<sup>①</sup>

と記されて居るのが、北宋に於ては最初の記録である。徐松の輯稿本は勿論、玉海卷一八四淳化惠民倉に引用する會要も此と同文であるが、この文章に於ては必ずしもこの年に創置されたとのみは解し得ず、むしろ以前からあつた惠民倉をこの様に利用する事としたとも理解し得るのであつて、文意不鮮明のうらみを免れ得ない。然るに、この記録の拔萃と思はれる文獻通考卷廿一には

五年令諸州置惠民倉。如穀稍貴即減價糶與貧民不過一斛。

として居て、明らかにこの年を創置となして居る。景定建康志卷廿三淳祐省割の中に

誦國史、咸平二年詔、諸路轉運司申、淳化惠民之制、歲豐熟則增價以糶、飢歉則減價以糶、懿範昭然、以平糶惠民爲先。……

とあつて國史に引用する咸平二年詔中に淳化惠民之制に關する記述が存する以上、この年に於て創始されたものである事は疑問の餘地がない。

この三資料を通覽すると、この年に惠民倉は政府の命令を以て諸州に設立を命ぜられたものであつて、穀價が少し高くなると、貧民に一斛づゝを限つて安價に販賣して彼等を救濟せしめ、豐年に於て市價よりはやや高く買ひ上げて米を貯備する制度であつた。約言すれば、(1)官立 (2)凶年のみの出糶 (3)貧民のみに販賣の三つがその基本的性格となるであらう。

惠民倉は官設のものであるから、總て政府命令を待つて始めて運用し得たのである。例へば貧民に出糶する必要が認められると直ちに政府に申請し、政府は官吏を派遣してその實狀調査を行ひ、もし許可が與へられればそれから販賣に着手する事になつて居た。それ

は常平倉等を始め社會政策的意義を有する諸倉に共通の事であつた。一度出糶を行へば、倉官が少からぬ不正利益を擧げ得るのであつて見れば、發動の必要がなくとも勝手に行つて私腹を肥やす事が自ら企てられるのであらうから、その監督の必要は大いにあつたのである。然し乍ら、運用者から言へば、この様な複雑な手續を必要とするならば、急場の間には合はないので咸平二年十月に

是月勅、先詔諸州惠民倉、如在市斛斗價高、人戶闕食速具聞奏。當差官往彼減價出糶。深慮申奏遲延。

自今止委知州通判幕職官吏互監開倉、比市價減錢零細出糶（永樂大典卷七五一三所引宋會要咸平二年十月の條）

の勅によつて、實際の運用は知州通判幕職の共同處理に委任して朝廷への伺立ては省く事とされ、且

咸平二年十月十七日詔、令諸路轉運司、管内惠民倉、處置豐熟則增價而以糶、歉則減價而出之（同上）

の如くその最高責任は轉運司が負ふ事に定められたのである。

此所に、諸路轉運司はその管内に惠民倉があつたならば云々と記されて居る事でも判る様に、淳化の令によつて津々浦々まで設置されたのでない事は言ふ迄もないのであるが、同時にこれが全くの机上計畫のみで終つたのではない事は、宋會要(同上)に續いて

咸平二年十月庫部員外郎成肅請於福建路置惠民倉。

從之。先是三司言福建不須置倉。肅以遠俗尤宜存恤。故有是詔<sup>③</sup>。

とある事からも認められるであらう。これによると、淳化の制に於ては福建路は三司の上言に基いて、その地の文化の進歩が遅れて居ると言ふ理由によつて、惠民倉の設立から除外する事になつて居た。然るにこの時、成肅はそれなら増々必要であると論じ、遂にこの詔を得て本路にも施行する事になつたのである。蓋福建の地は多くは山地で生産が不振であり、加ふるに日比野丈夫氏や北山康夫氏が論ぜられる様に、從來最文化の遅れた地方であつたのに、この頃になつて生産の改良、文化の發達の爲に最熱心に努力されて居たのであつたから、目前の困難を打開する爲に惠民倉が待望されたと言ふのは尤な事であると言へる。福建に於て

特に進んで設立が希望されたのは、他の何處かに於て又は各地に於て惠民倉がかなり成績をあげて居た事を前提として考へねばならぬ。かうしてとも角惠民倉は日の光を浴びたのであるが、其後大きな意義を持つに到らなかつた。

咸平二年を最後として、其以後に本倉に關しては何等記されて居ない。曾我部氏は「天禧四年には、荆湖川峽廣南地方にも増置した(前出)」と言はれ、鄧雲特氏もこれに和せられる(前出)のであるが、兩氏共その論據を示されて居ない。然し多分これは宋史卷一七六に

※ 天禧四年詔、荆湖川峽廣南皆置常平倉<sup>⑤</sup>

とあるのを惠民倉と誤られたのではないかと思ふ。仁宗及神宗時代は常平倉が非常に活躍し、義倉も再三廢止され、乃至は設立を乞ふ事にさへ禁止をうけた位であつたから、本倉の如き小規模な、且貧民相手の事業が、時代の脚光を帯びるに至らなくなつたのは當然の事であつて、それが、中には地方的に行つた所もあるかも知れないが、とに角時代的な生命を失つたのは事實である。

北宋の惠民倉が、どの様に運用されたかに就ては、宋史卷一七六常平義倉の序に

又置惠民倉、以糴配錢、分數折粟貯之、歲歉減價出、以惠民。宋兼存其法焉<sup>⑦</sup>

と記されて居るから、平常和糴の形式に従つて金を以て穀にかへ、それを凶年の際に、時價より安く賣り出したのであらう。これによれば、淳化の制は北宋全體を司配するものと考えざるであらう。

### 三 南宋の惠民倉

南宋に於ては、惠民倉設立に關する法令は一度も發布されなかつた。にも拘らず、各地に斷續してその設置を見たのである。それで先づその一つ一つの實例を年代順に記述して見たいと思ふ。

#### (1) 南昌府

南昌府志に<sup>⑧</sup>

舊無。今在惠民門裏。紹興二十年張帥澄建。受納苗米、與大寧倉同。俗曰南倉云

と見えて居り、紹興二十年にこの地に帥たりし張澄が苗米を基として設立したもので倉基は城内にあつた。

唯詳細の情景を知る事が出来ないのは遺憾である。

#### (2) 延平縣

延平志に<sup>⑨</sup>

董守洪以其地狹田少細民多私販、每遇小歉卽有指廩之意。端平乙未特勅此倉。每就順留糴米二千石儲之。規式如均濟倉。委趙推彥居掌之。峽陽之民鼓舞拜賜。生爲立祠。

とある。元來延平縣は閩江上流に位するので、生産が振はず、細民は多く米を買つて生活して居たのであるが、それが少しでも不作であると忽ち食料につまり、倉廩の設立を要望する聲が何時も高かつたのである。そこで縣令である董洪が、端平二年になつて惠民倉を設立し、平作時には何時も年々二千石を買つて此を貯へ、均濟倉と同じ規式をとつた。且倉の經理は趙彦居に委任して掌つてもらふ事とした。民衆から非常に喜ばれ、董洪は生祠を立てられたと言ふ。この均濟倉に就ては管見の及ぶ所でないで、この倉の運用法を知り得ないが、それが年々二千石買ふと言ふ以上は、年々二千石を賣る事を包括するのであるから、秋冬時に買ひ春夏の候に賣り、且それが細民の販を助けるもの

であつた事だけは疑ない。しかも非常な豊年又は凶年は倉を開く必要がないか又はその力の及ぶ所でないかであるから、その年は惠民倉の活動は停止されたわけである。

### (3) 蕪州

蕪州惠民倉は太守李誠之の苦心經營に拘る所である。宋史卷四四九の彼の傳によれば、彼は金軍侵入に對する防衛の使命を帯びてこの地に赴任してから、要塞を築き兵を整へると共に穀四萬石を貯へる等、大いに準備を行つたのであつたが、嘉定十四年三月に月餘の奮戦の後城陷つて戦死した事が見えて居る。所で問題はこの四萬斛の穀で、この記事からではそれが如何なる倉に貯へられて如何に使用されたか明らかでないが、此等の記述の原材料と思はれる眞西山集卷廿四蕪州惠民倉記には、前述の戦備を詳述した後、守城には民食を足す必要のある事に及んで

……未幾得粟爲萬石者二、靡錢緡若干萬千百有奇。築屋若干楹、以謹其出納。命之曰惠民倉。著公志也。夫民食足然後有固心。人心固然後可冀以死守。

と論じ、その目的の爲に惠民倉を設立して民食を保證せんとしたのである。倉が出来て後朝廷に報告してその核準をうけ、朝廷はその實を調査した後、眞德秀に倉記を作らせた次第を記して居る。此を泣蕪錄に徵すると、

惠民倉太守李誠之所創、糴米三萬石。當時議者曰、此倉不可創。恐爲後人塵腐之累。而太守確意爲之。今歲增一萬石以爲後人補虧之助。及蕪一破、應于庫于不留片瓦。惟此倉獨存。目今飢民流歸者、賴此存米、故得不死。以此見憂國念民、身歿之後人被其澤如此。

の様に、創立當時は三萬石、後増糴して四萬石とした事情がわかる。一部の反對論を押切つて作つたのであるが、蕪州が陷落して李誠之が戦死した後も、他の諸倉庫が一片の瓦さへ留めぬ中にあつて、この倉のみが完全に生命を保ち、飢民の爲に救済の手を延してやつたと言ふ。陷落後も生命を維持した事は、彼の墓表に初公爲惠民倉、囑某其事於石。變亂之餘公私虛舍具蕩滅。而此倉巋然獨存。遺民來歸、賴以有濟。公雖死其惠猶足以救飢殍活生靈。可不謂仁矣乎。(眞西

山集卷四十李正節墓表——大典七五・一三所收）

とある事によつてもうらづけられるのである。此を要するに本倉は太守によつて始められ貯穀四萬に達したものであつて、一般民戸の食を保證する事を目的とし相當立派な成績を擧げて居たと言ふ事が出來よう。

#### (4) 潭州

宋史卷四三七眞德秀傳と戊辰修史傳は同文で左の如く見える。

復立惠民倉五萬石、使歲出糶。

時に嘉定十五年であつて、眞德秀は湖南安撫使知潭州の職にあり、五萬石の穀で惠民倉を興し年々出糶を行つたのだと言ふ。今此を眞西山集卷十奏置惠民倉狀（大典七五・一三）及び鶴山大全集卷四二潭州惠民倉記によつて、少しく詳細の情景を描寫して見ると、先づこの倉のモデルとなつた張咏の救荒政策に遡らねばならぬ。

國朝張咏淳化中守成都、以蜀地素狹生齒寔蕃、稍遇水旱民必艱食。時米一升直錢三十六、乃按諸邑田稅加其數、歲折米六萬石、至春籍城中細民計口給糶、俾輸元估糶之、奏爲定制（奏置惠民倉狀）

臣竊見、淳化中張詠守成都、以市古準田稅使民歲輸米于官、明年春籍城中之民糶以元直（惠民倉記）

これによれば、淳化年中に米六萬石を以て大規模な社會政策を行つたのである。なる程彼は當時李順の大亂を鎮壓する爲に益州に牧となり、種々の社會政策を以て治盜の方法として來たのであつたが、彼が行つたのは

張詠守蜀、季春糶廩米。其價比時減三之一、以濟貧民。凡土戸爲保、一家犯罪一保皆坐、不得糶。（救

荒活民書卷三張詠減價糶米）

の如く、治盜の爲に土（恐らく十の誤）戸で一保を作り、それにすべて連帶責任を負はせると共に、思惠的に春の末に時價の三分の二で貧民に米を賑糶し、保を單位として、有罪者を有する保はこの特典から除外したのであつた。その後一時中絶して居たのを王文康が復活したと張詠減價糶米に引つゞいて見えて居るが、

皇祐中令常刻石遵守、至今行。且百年。其法一斛止約小鐵錢三百五十文、人日二升、團甲給歷赴場請糶。歲計米六萬石。始二月一日至七月終。貧民缺食之際悉被朝廷實惠（同張詠賑糶法）



皇祐年間に至つて一斗三百五十文と言ふ公定價格を定め、二月一日から七月末迄の間貧民に對し一人二升を限度として出糶し、その爲に六萬石を用意したのであつた。この事は宣和五年の臣寮の上言中に現れて居るのであるが、皇祐から宣和迄百年近く引續いて行はれたと言ふのである。

そこで前記の奏置惠民倉狀を見ると、眞德秀はこの三つの事實を混同して、それをすべて張詠の事として居るのである事が判るのであるが、それが誤解である事は言ふ迄もない。唯これは誤られ易い事で、張詠が有名であつただけすべての善政を彼に結びつける事はよく行はれたらしく、この「張詠賑糶法」にしても蜀の父老の言として、蜀の良二千石と言へば張詠ばかりをかつぎ出すが、實際は徳政を行つた地方官が非常に多い。例へば賑糶法にしても皇祐時代に……と言ふわけで紹介して居るのである。眞德秀も又誤解した一人に違ひないが、いづれにしろ張詠の行つた隣保制度を貧民救済に活用する事と、皇祐中に始められた賑糶に際しての公定價格販賣の二つが——それだけでは無論惠民倉ではなかつたが——眞德秀にとつて大きな刺戟となりモデルとさへなつたのである。所で彼に刺戟を與へたものは、なほ慶元以來潭州に行はれて來た社倉も考慮せねばならぬ。

慶元初、長沙宰饒幹創社倉二十八所。他縣皆未有也（涿江志・永樂大典七五一〇社倉所收）

社倉と惠民倉は密接な關係があり、眞德秀自身も後に社倉を興すのであるが、實際州内に行はれて居た社倉を見て、それを都市に於て行はうと言ふ意欲を興したと思はれるのである。かうした影響を受けた爲に、彼の惠民倉は極めて特色あるものであつた。

臣之於賑無能爲役。然心竊慕之。考之吏牘、本州秋稅米內有所謂折梗者。本正苗之數。其後折錢以充郡用……臣今措置、自今歲爲始、將上項折梗令人戶輸納、本色更不折錢。以嘉定十六年納到數目計之、合正與耗爲米五萬餘石、別赦盛貯名曰惠民倉。歲々賑糶。其規模大略悉倣張詠之法。庶幾城市細民自此永無艱食之虞。而因養寓教、又於風化不爲無補……

（惠民倉狀）

彼の計畫によれば、潭州に於て古く折梗と稱して正稅の一部を米で納めて居た（後それも又錢にかへて、此

を郡の費用に使用して居たが、事のあつたのを法的根據とし、嘉定季年から開始してこの折梗は必ず米でおさめさせて錢に變へる事を許さず、これによつて年々五萬石餘の米を得てそれを惠民倉に貯へる事とした。此所に「合正與耗爲米五萬餘石」と記されて居るが、慶元條法事類卷四七所收の倉庫令に

諸受納稅租一斛加一升舊例不加  
支盡有欠者聽  
耗內除二分 蒿草十束加一束爲耗  
即折變爲見錢者、其耗不計

と見える様に、もしかの折梗を見錢に折變したならば、耗はとり得ないのであつた。彼はそれを禁ずる事によつて、この令に従つて一割の耗米をも徴し得たのである。それはとも角として、彼の方法は要するに張詠のそのの直譯であつて、唯その貯米を惠民倉に於て別儲した事と、彼に於ては田稅を利用したのに此にあつては折梗を活用した事に差を求め得るに過ぎない。かうして政府は何等物質的負擔を被らず、しかも年々米は更新するので貯米の風化の恐れもなく、又

故府有秋稅米合正耗凡五萬餘石、石出錢四千二百、以給郡用。臣請得如成都故事、斷自嘉定十六年、使民輸米貯之別倉、榜曰惠民。蠲槩量之贏、罷轉輸之

費、較以輸泉。輕重略等於公家。既無捐而糶之。(惠民倉記)

普通の方法の様に特別にこの爲に資本を準備しなくてよいし、倉を獨立させるのに比する時は、米の榷目の問題がなく、且米を產地から賣地に運ぶ輸送費も省け又米を買ふのでないから、買入價が賣出價より安くて損をすると言ふ様な恐れも、全くないと言ふ風に、種々の利點を有して居たのである。

次に出糶の方法を見ると、

日自二月訖七月、正新陳未接民苦糶。而計口給券、視時直加損焉。則於一城生聚爲利甚博。況又什其民以相保、受有麗於罰則毀券住糶、保受者同之。(惠民倉記)

新穀がまだ出來ず、一方舊穀は少くなつて民が米を買ふのに最困る時期即ち二月から七月迄の間に、城内の人々に對して賣り出すのである。その場合、戸口數の調査を行つて券を發行し、各十戸をして相保せしめて不正を防止する策とし、萬一罰をうける様な事を仕出かせばその券を無効とすると共に保内各戸は同罪とされた。惠民倉狀に庶幾城市細民云々とある様に、細民

のみがこの恩典に浴した事は言ふ迄もない。出糶法も又四川での方法が全般的に採用されて居るが公定相場はなく、賣價は時價を減ずるのみである。

眞徳秀の計は嘉納せられ、寶慶元年正月五日、勅を以て施行を命ぜられ、惠民倉狀にその勅文をも附載して居る。然もその文は極めて平凡であつて

……意俾百姓歲受平糶之惠、又可保全常平義倉水旱之備……

とあり、以下張詠及惠民倉の由來を概述するのみである。越えて二年曾從龍が惠民倉を廣く設立したのであるが、彼の行つた方法は眞徳秀と同一ではない。従つて眞徳秀の切角の文案も、恐らくは紙上計畫を出でなかつたのではないかと考へられる。彼の計畫は、資本を有しないので非常に虚弱である事を免れず、税米の一部を錢に換へる爲に、時價より安く賣ると言ふのは、多少頼りない感情を消し難い。換言すれば性質上紙上計畫に終る可能性を最も多分に有して居たのである。

曾從龍は、紹定元年八月潭州の十二縣に惠民倉を設立する許可を得た。彼は着任以來一年半の間、不急の

役をくり延べ、無名の餽を省除して、十萬一千九百緡の資本を準備したのであるが、その任を南昌に轉じたのを機に、全資をあげて此を縣内大小戸の多寡に應じて各縣に頒ち、各縣に於て惠民倉を作らせ、令丞をその責任者として春夏に於ける貴糶防止につとめさせる事とした。即その資によつて米を買ひ、それで賑糶を行ひ、年々際々循環して糶糶をつゞける事とされた。即彼の方法に於ては折梗その他税とは全く關係なく、經常費のやりくりによつて資本を作つたのであるから地方廳即縣の令丞が責任を帯びたのである。

溫陵曾公爲守、守之弗失。尙慮外邑市民歲當春夏之交常苦貴糶、脫小不登將無所於訴。蓋公居郡以來、貢賦之辦式、邦國之經用、毫髮無所損益。惟不急之役無名之餽、是省是去、僅一年有半視元授之數既增。會移鎮豫章。乃出幣餘、酌縣之大小戸之多寡而平頒之、屬令承時其糶、以備賑糶、以復糶、糶已復糶、循環無窮。自長沙善化外爲縣十爲緡十萬一千九百……(惠民倉記)

なほ長沙府淶江志には、次の如く見えて居るのであるが、これによれば、令丞は惠民倉に對する成績を、任

期満了に際して彼の功過に數へられ、それによつて榮進又は左遷せられる一條件とされて居た。常平使がその調査にあたり、其他諸事は常平法に準じて扱はれる事となつて居たのである。

昨安撫買侍郎爲惠民倉、以糶于城、爲社倉以貸于郊。大參會公繼之、守而不易。會移鎮南昌、捐十萬一千九百券分于外十邑、以備賑糶。吾邑得一萬二千券爲糶本。公奏請視常平爲定令、令丞以主管惠民倉、繫銜任滿、稽存否以爲功過。常平使者察焉……法時其糶以備糶、糶已後糶、循環無窮。皆爲邑市小民計、稅家亦助糶本。遂免縣門貯糶繫運之勞。曾從龍の改組した惠民倉も、間もなく色々な困難に相遇せねばならなかつた。

然官吏之侵移借充、與夫過歲歉糶難而價貴、迨糶廣而價平則本錢有虧。(淶江志)

第一に官の設立した倉であるから、官吏がこれに關係する事を禁じ得ない。官吏が關係すれば或はそれをごま化して着服し、乃至は借用と稱して返還せぬ等の現象を見るのは又必然の運命であつた。かゝる官吏の不正によつて糶本が失はれると共に、第二に制度的な缺

陥から、自然に損失を被る事もあつた。例へば少し凶年に際會しても、貯穀せねばならぬ爲無理に高價で買上げると、春夏の候には他の州縣から多數の米が流れ込んで米價が低落し、買入價段よりずつと安くなる爲大損をする様な事も起つた。それで漕吏李少卿は、惠民倉運用に對し、左の様な規則を追加したのであつた。

漕使李公少卿憂之、跋于惠民倉記之下、且欲通變無弊。每歲歛散之際、謹察而周視之、行數抑加斛面、取靡費則糶時察之、減戶口、削升合、苛限隔則糶時察之。至於入以儲積而耗、出以優饒而折、糶價增糶價減、因是而本錢有虧。少卿慮之尤詳(淶江志)

即買入に際しては(1)安く買ふ事 (2)斛をよくする事 (3)手數料をとる事を、賣却に際しては(1)虛口には賣らぬ様注意する事 (2)斛を減ずる事 (3)制限を守る事等を、惠民倉記の跋に於て示したのである。これは貯穀に於て生ずる耗を考慮し、又拙劣なる商賣によつて不當に安く賣り高く買ふ等の點を矯正する意味を有し、要するに技術的な面に於て缺陷を補はうとしたのであるが、ひるがへつて考へて見ると前記の官吏の不

正や制度の缺陷などの本質的問題には少しも觸れて居らず、それを末梢的な點について倉の利益を考慮しても——殊にそれが惠民倉の本旨に沿つて居るのではなく酷吏的な手段によつて居るのである以上——事態が改善されるとは思はれないのである。要するに彼は一箇の事務家に過ぎなかつたと言ふべきであらう。

其後大帥余公が五十萬緡を節して惠民倉新庫を起した。而して、この質庫のあげる利息を以て、専ら長沙善化以外の十縣に於ける虧折の補充にあてた。<sup>(14)</sup> 經濟的困難に對抗する爲には經濟力を有する事が最よい事であつて、惠民倉としては到達し得る最高の點まで考慮したのであらうが、それもどれ迄實際には役立つたか疑無きを得ない。

繼而大帥余公輟五十萬券創惠民倉新庫。所得利息專以防外十縣虧折。仁人之慮遠如此。(涑江志)

以上は本州に就て概述したのであるが、次に曾從龍によつて擴げられて以來存在する様になつた各縣惠民倉の跡をもう少しとつて見よう。先づ長沙縣では一萬二千緡を頒たれて倉を始め李公の影響をも最直接にうけた事は前に涑江志によつて見て來た所であるが、

攸縣に於ても攸縣志に<sup>(15)</sup>

紹定戊子大參曾公從龍帥潭。曰置惠民倉。其後糴本隸督府。淳祐乙巳大使別公之傑照元額發下見錢二千一百七十貫十七界官會八千九百貫道。仍舊椿管在倉各熟、收糴以濟春夏發糴。官吏奉行唯謹。

とある様に同じく紹定元年曾公創設に拘はり、官吏が管掌し、年々秋冬に收糴して春夏に發糴するなど、皆長沙縣と同様だと言へる。此所に於ても糴本の減少が防止し得なかつたと見えて、淳祐五年に大使別之傑が見錢二千七百七十貫十七界官會八千九百貫をこれに補充して居る。かうした事は他の縣に於ても亦あり得る事であらう。

曾從龍が潭州管内に設置した實情は長沙攸二縣以外では記録がない。然し鶴山集の惠民倉記に「自長沙善化外爲縣十」とあれば善化縣も此に加へ得るであらう。宋史卷八八潭州によれば、本州は長沙安化衡山醴陵攸湘鄉湘潭益陽瀏陽湘陰寧鄉善化の十二縣を含むで居る。長沙善化他十縣とはこの十二縣を指すものと考へられる。涑江志には「分于外十邑」とあり、又余公の場合にも「以防外十縣」と見えるが、此に従へば潭

州は外十邑と内二邑に大別され内二邑は長沙善化を指したのであると思はれる。元來善化縣は「元符元年以長沙縣五鄉湘潭縣兩鄉爲善化縣」(同上)であり、従つてこの二邑(縣)を一つのものと見る習慣があつたのであらう。内では長沙に外では攸にその實例を見出し得た以上、他の州縣に於ても亦實際に設置されて、それ／＼の歴史を有つたであらうと想像される。

約言すれば潭州では眞德秀の理想案に始まり、曾從龍が十二縣に創設、後李少卿の辦法や、余某の外十縣に對する質庫の設定などがあり、又各倉で個別的に資本を補充されたりした事もあつたが、都市細民の夏春に於ける救濟策であり、又官營の倉であつた點に於ては一貫して居るのである。

#### (5) 新定縣

新定續志に桐廬惠民倉と題して見えて居る。

在常平倉後。山下爲小樓以居掌鍵者。知縣趙汝渚建。糴有餘賑不足。邑人便之。今惟倉存。

知縣趙汝渚の創建によるものであつて、冬糴春糴を行つたものであらう。いくら多く買つても賑は不足して困つたと言ふから、中々成績をあげて居た。倉吏の居

もやゝ離れて作られ、倉は常平倉に接して存したが、何時しか廢して倉屋を留めるのみになつたと言ふ。

以上の様に南宋に於ては全體的にばら／＼とではあつたが——年代的にも地域的にも偏る事はない——各地方長官の手によつて惠民倉が興された。それは官倉であつていづれも城内に設置され、毎年生ずる春夏の艱糴に際し、細民の食を保證するものであつたと言ふ事が出來よう。この五州縣以外にも設置されたものは少くなかつたであらうが、それが皆地方的性格の故に中央の記録に残らず、従つてその存在をつきとめ得ないのは残念である。

#### 四 惠民倉の性格

前二節で見えて來た様に、惠民倉は北宋と南宋とで性格を同じくしない。都市貧民の救濟を目的とする社會政策的な賑糴倉である點は共通するが、北宋に於ては法令によつて統一的に作られたものであり、南宋に於ては地方で自發的に作つたのであり、彼に於ては官の倉であり、此に於ては地方廳の倉であり、彼にあつては和糴によつて貯藏を行ひ、此にあつては必ずしも然

らず、而して北宋倉は凶年時の備へであるのに對し、南宋倉は年々の春夏に對して準備したのであつた。その諸點こそ見逃してはならぬ重要な點である。

鄧雲特氏は惠民倉の性格は次の二點に於て特徴づけられると言はれる。(1)常平倉は經濟が獨立して居るのに反し、惠民倉は本錢が補助によつて得られてゐる。

(2)「以雜配錢折粟貯之、歲歉則半價糶出」と。(1)の點は創立資金が共に公費によるのである事は、むしろ共通點と言ふべく、特に取あげる價值はない。又、(2)の點は此は宋史卷一七六食貨志常平義倉の序と同文であつて、唯最後の「半價糶出」のみは宋史では減價出となつて居る。鄧氏が何によつて半價にすると論ぜられるのか知る事が出来ないが、上記の如く南北宋を通じて半價にした例は管見には觸れ得なかつた所であり、半價が一般的であつたとは到底信する事が出来ぬ。又これ以外は、宋史に出づるのであるが、その文は北宋のみに通用する事である事は前に論じた所であつて、要するに鄧氏の論には特に參考すべき點は無い様である。

曾我部氏は「當時の常平倉などゝは同じ種類のもの

であつて、續通典には明かに常平倉の異名として居る」「かく同一目的を有する二つのものが、同時に行はれる事は、支那の如き尙古主義の所ではよく遭遇する事であつて、異とするに足らない」と論ぜられ、惠民倉は常平倉と異なる所のない所以を力説された。然しそれは、(1)凶年時の貧民救濟倉である事、(2)續通典に「此即常平倉之制。特異其名耳」の記述がある事(3)目的の同一な事に根據づけられるのであるが、(1)は細かに觀察すれば大きな差異のある事は前に記した如くであり、(2)は續通典の價值如何に拘るわけであつて、魯迅がしばしば主張した様に乾隆の勅編が多く疏雜であるとするとすれば、此も亦かへつてその一例を提示した事になる。(3)も實際とは言ひ難いのであつて、常平倉は實に多くの目的を有し、決して單一ではない。その内常平法のみに就て言つても、常平倉は米價の常平を目的としてその暴落暴騰に反對するのに比し、惠民倉は都市細民の救濟を志向して米價は第二義的にしか考へられて居ない。又假に常平倉の同種のものとしても同種のものゝ併存の理由を尙古主義に歸せられる事は論理に合はない。即尙古主義による並存は或機關が生

命を失ひ、それに代つて新興の某機關がその使命を果しつゝあるのに、なほ舊機關を尙古の故に廢しないのか、又はある機關が存するが、それは古典によれば某機關が當るべきであるから、某機關をそれに並存せしめるか、いづれかでなければならぬのに、常平倉は當時有名無實の存在ではなかつたし、それに惠民倉は聖賢の書には勿論、漢唐の制度にも存しない全然の新發明であるからである。この様に考へて、私は曾我部氏の御高説にも亦賛意を表し難い。

そこで出發點にかへり。性格の一つ／＼を檢討して行く事とする。先づ、都市細民の救済を目的とする點は、都市細民の増加と表裏をなすのである。宋代に都市の發達の著しかつた事は、加藤博士その他多くの論著の存する所であるが、それは唐以前の如き官設的なものと著しく異り、商工業殊に商業の發達、貴族の没落による讀書人の増加、農村不安による人口の流動、及び佐伯富氏の論ぜられる様な都市と農村との負擔の不均衡等々の諸原因によるものであらう。果して然らば、唐以前の都市が、大都市は貴族と彼等に奉仕すべき商工奴隸、地方都市は豪族と農民から成立ち、統制

されて居たゞけに或程度の安定を有したのに比し、宋代に於てはあらゆる職業の人があぶれて居たわけであり、自由であるだけに放置せられ、失業者準失業者困窮者が多數發生して首都と言はず縣城と言はず大きい社會問題となつて居たのである。東京夢華錄にさへ貧人は如何にすべきかと再三記されて居るのである。太宗が又南宋の良二千石がこれに考慮を拂つた事は、止むに止まれぬ必要に出發したのであらう。

北宋が軍事政治經濟社會文化の各方面をあげて、完全な專政國家であつた事は論議の餘地はない。然るに南宋となると形勢は幾分變つて來た。軍閥があちこちに居て必ずしも中央の統制下にあるとは言へなかつた。財政は地方分權的となり、制置使等の地方機關が半獨立の形を呈し、社會は動搖し宣和の文化も亦見られなかつた。中央が專政的であつても地方はその命令通りに動かなくなつて居た。又逆に言へば地方の希望は中央では容れられるとは限らなかつた。岳飛の悲劇も文天祥の活動も、皆この時代の所産である。北宋の惠民倉の統一性、南宋惠民倉の地方性或は彼の法令一片によつて劃一的に造られたのに對し此は地方々々で自發



的に別々に作られた事、更に又彼は官倉であるのに此は州縣倉である事は、皆上述の様な、兩宋に於ける諸事情の變革が、自ら露呈した差異であると言はねばならぬ。

農業國家である以上穀物の生産と消費の調整が必要缺くべからざるものである事は言ふまでもないのであつて、凶年に備へる事は傳説時代から考へられて居たのであるから、北宋惠民倉の必要性は十分承認せられる理由がある。にも拘らず、それが常平倉等に壓倒されてしまつた理由は、色々な點で常平倉に強みがあつたからである。然るに南宋の惠民倉が何故に北宋の先蹤を追はうとせず、春夏に於ける賑糶を企圖したかと言ふに、それこそ時代が切實に要求して居た事だつたからである。曾從龍が倉を起したのも、縣城の市民が年々春夏の米價騰貴に苦しむ様を見て發心したのであると言ふが(鶴山集四三潭州惠民倉記)、さうした情勢は眞德秀が惠民倉の必要性を力説した奏狀に最よく畫かれて居る。

臣在官二年、春夏之間郡城居民率苦貴糶。蓋其生齒阜蕃、土產有限、全仰客米以濟其乏。若鄴路與上江

歲豐穀賤、轉販者多、僅免闕食。一或不然則市直驟增、貧民下戶立見狼狽。常平義倉之儲本自無幾。加以法禁嚴重、非饑荒已甚之歲、不敢輒請發糶。故二年之間雖苦貴糶、臣皆那融借撥別色米斛以糶。而不敢遽發常平。至今夏米價益翔、借撥之米不足以繼。

然後海申常平司得米五萬石賑糶。一城生齒賴以全活。而分家之積則已垂罄矣。今歲一旱所傷甚多、來春以後民食必乏。倘不蚤爲備預之計。惟盼盼焉。須客販之至一或不繼、其將奈何(眞西山集卷十、永樂大典所收奏置惠民倉狀)

嘉定之季年潭州守臣眞德秀言、所領州生齒阜蕃地力不足以給。率仰于商舟。舟至之不時、則上下狼狽、雖有常平義倉之蓄、而令非凶歲毋發也……(鶴山集卷四三潭州惠民倉記)

此によれば、縣城に住む民は全く商舟に依存して居たのであつて、彼等が豊富に客米を供給してくれ、いざそれでも差支ないのであるが、一度穀價が上れば貧民が非常な困難に當面せねばならぬ。常平義倉は全然物の役に立たないから、別の方法を考へねばならないと言ふのである。何故にこの様な商人にすべてを支配さ

れて居る有様になつたのであらうか。西山集では人口が増加するのに生産がそれにとまなぬからであると言明し、鶴山集もこれにならつて居る。都市人口の急激なる増加は、確かにその有力な一因である。然もその都市があらゆる遊手の集りであつて、中世都市の住民が或は官吏として軍人として乃至は農人として自ら米穀を得て居り、農村と直接のつながりがあつたのと異つて、此所では米穀とも農村とも縁のない人々が殆どであつた事が、更に致命的な點であらう。かうして都市住民はその生命の糧を商人に任せて居るのであるが、それが米價が上ると何故にこの様に困るかと言へば、それは閉糴と言ふ現象がそこにもち上る爲である。即一度騰貴の聲を聞けば、商人・富豪・地主等を通じて、持てるものは投機を考へて一齊に門を閉す爲に思惑的な不健全な暴騰を演ずる事となるのである。然も春夏には、米穀が必然的に少くなつて居るので、この現象が年々もち上るのであるが、この際に富豪不在地主商人等のかへつて利益をあげ、中産以下の人々のみがこの困難にぶつかるわけである。かうして年々訪れる春夏の苦難を見る人は、州縣自身で此に備へね

ばならぬと考へるに違ひないのである。多少共良心があれば、民衆の聲を此所に於て見出さねはづはない。鶴山集の前述の倉記に、

是法民惟恐法之不久也

と見えて居るが、如何に民にとつて歓迎されて居たか、その聲を聞き得る様な氣がする。南宋倉が北宋倉を襲はず、かゝる制をとつた事は、時代の聲に應じたものと言ふべきであらうか。

この様に、春夏の艱糴に備へたと言ふ意味に於ては、本倉は社會と同一の經濟現象に對應して居ると言ふ事が出来る。社會は種々の點に特異な性格があり、運営に於ても又惠民倉とは全然相違する點が多いが、春夏に於ける米價に對應した事は兩者軌を一にするのである。

太守到任以來、無一念不在斯民。近因禱雨思所以爲邦人久遠之計。在城則惠民倉、儲米數萬石、歲々糴。在諸縣則廣置社倉、儲穀數萬石、歲々出貸、其爲慮悉矣。(眞西山集卷四十、大典所收、勸立義廩文)

昨安撫眞侍郎爲惠民倉以糴于城、爲社倉以貸于郊。

……俾鄉邑之民俱有所恃、不至難糴。(長沙縣漆江志惠民倉の項)<sup>③</sup>

この様に社倉と並置され、社倉が鄉村に於てその使命を果し、惠民倉が城邑に於てその任に當り、兩々相まつて完璧となつたと言はれて居るのであるが、この兩倉が併存される事は偶然ではない。南宋惠民倉は福建江西湖南湖北四川にばらまかれたとするならば、社倉の分布も亦大體同様となるのである。是もこの性格と結びつけて考慮さるべき事柄であらう。而して、南宋に至つて社倉が普及された事は、惠民倉の性格が北宋に於ては凶年對策であつたものが、南宋になつて自らこの様に變革された事實と相待つて、春夏に於ける難糴が南宋に於て特に深刻化した事を推定するのは、やゝ速斷に過ぎるであらうか。

それはとも角として、上記の如く惠民倉は全く時代の兒と言つてよい。宋代に發生し、時代が必要とした要求に應へ、そしてその爲に性格に於ても根本的な轉換をさへ示したのである。その故に民衆から熱心に支持された。それにも拘らず、前二節で見て來た様に、極めて短命に終り、蜉蝣の悲哀を演じつゞけたのは、

一體何に由來するのであらうか。蘄州惠民倉にしてもその設立以前から

當時議者曰、此倉不可創。恐爲後人塵腐之累。(泣薪錄)

と論ぜられた位であつて、その生命の長くない事は、萬人の豫見し得る所であつた様である。思ふに惠民倉は制度的にも又社會的にも種々な缺陷を藏して居た爲と思はれる。

北宋の倉は、ペーパープランの傾向があつて、法令は出しつ放しとなり、これに對する十分な經濟的な又人的な準備がなかつた事が、何と言つても致命的であつたらう。従つて設立を見なかつた州が多かつたらうし、設立したとしても基礎薄弱で、長持ちしなかつたのは當然と言へる。

南宋に於ては制度的には缺損に對する準備の不足を擧げねばならぬ。長沙縣の例に於て見て來た様に、凶年に於ては秋冬でも米價甚高く、従つて春夏になつて他州からの出廻りその他の原因で、價格が低下する事になるから、元價を切つて賣らねばならぬ事が多い。こゝは免れ得ない運命で、他州縣でも同様である。又

南宋に於ては官會がしばしば暴落して居るが、もし春に賣つた後にこれに相遇すれば、惠民倉の糶本は廢紙に歸する事になる。この様な大きい缺損は、さけ得ない所だとすれば、それに對應し得るだけの準備——例へば確實なる財産・收入等——がなければならぬ。

この點に於ては潭州惠民倉が質庫を有し、その收入をもつて倉をバックした事は十分敬意を拂はれて然るべきである。質庫は社會等に於ても附設された例があるが、最確實な投資として有効な方法であつたと思はれる。他の州縣に於ても又かうした準備が是非必要であつたのであつて、徒手空拳を以て貧民救濟を行はうとしても、それは無理な相談と言ふべきである。

次に社會的な面から觀察すると、先づ救荒補遺上余童斬州賑濟法に

盡括戸口之數第爲三等、孤獨不能自存者專賑濟、下戸乏食者賑糶、有田無力耕者與賑貸……

と見えて居る。救荒活民書に此と同様の意味の事が散見して居て、例へば

中産之家賑貸之所不及……(卷一、祥符中澶州上言)  
賑濟此係用義倉米。其法當在老幼殘疾孤貧不能自存

之人、使無告者免於天亡。……

賑糶此係用常平米。其法在于平準市價、默消閉糶之風。賑貸……其法專及中等之戸與夫農民耕夫之無力者。(以上は卷二守臣到任預講救荒之政)

等である。これ等を通觀すれば、等外のカード階級は賑濟法によつて給與してやり、下等戸は賑糶法によつて食を保證してやり、それよりやゝましな中等戸即多少の産を有するものは賑貸法によつて融通してやり、中産以上即生活にさして困らぬ者以上には賑貸法の恩恵を受ける事からさへ除外されて居た事が判る。さうすれば、當面の惠民倉はまさに賑糶法を行つたわけであるから、下等戸の食を保證すべき性質のものであつたはづである。戸口調査を行つて貧戸のみに給與した事は、兩宋を通じての現象であるが、この貧戸とは將に此所に限定した様な意味での下等戸を指すものであるに違ひない。何故となれば、カード階級には、廉價販賣でさへ買ふべき資本がなく、中等戸即最低の有産者には、彼等なりに別の辦法があつたはづだからである。さうすればこの意味での貧戸は非常な恩恵をうけるであらうが、他の諸階級は果してどうであらうか。

北宋でも南宋でも官僚が惠民倉を設立して居る。官吏の義務だと言へばそれまでだが、實際經國濟民の熱意もあつたらうし、又創立者は自己の功績として認められると共に、後に局に當るものも治績の功過に算入された事もあるのであるから、或程度の熱意はあつたであらう。それにかうした事業には、別途収入がつきものであるから、經濟上に於ても彼等に利益したはづである。官僚は義務としても利益としても、これを支持すべきであつたのに、事實は必ずしもさうは行かなかつた。涿江志に「然官吏之侵移借兌」によつて倉が危地に陥つたと見えて居るが、倉を喰ひ物にしてしまつた様な例は別としても、彼等の事務的才能の缺除が、惠民倉にとつて致命的であつたと言つても言ひ過ぎではあるまい。さうしてこの場合

加以姦胥視爲奇貨、賣弄百端、生理優裕者每費緣而多糴、困窮當賑者多沮格不得糴。富不能安、貧不能恤、……（涿江志）<sup>19</sup>

と見える様に胥吏が自分の利益の爲に富民を困らせ、それで居て出糶に於ては貧民には與へず、自分等と因縁のある者に渡してしまふ等、惠民倉の精神を全く踏

みにちる様な事を盛にやつて居る。眞德秀が蘄州惠民倉成立の際に於て倉記を乞はれた際に

始倉之成、公既以告于朝、下部使者核其實、又書來命某識之。其欲以諗後人俾勿廢乎。予謂使、繼至者有公之心、雖毋識焉可也。不然則金版玉書猶弗足紀。恃此以存難哉。雖然仁人心也。人心不可泯、則是倉不可廢姑識之。（眞西山集卷廿四、蘄州惠民倉記大典所收）

とて、倉記は倉に對する記録を残してその廢絶を防止する目的を有するのであるが、實際は倉設立の事情を知らせる事が倉の生命を長くする事にはならない。唯倉の運用に當る者が「公の心」を持つ事こそ唯一の道であつて、人心が仁を忘れ得ない以上倉は亡びないと論じて居る。然も上に立つ官も、實務に當る胥も、公の心を缺き仁を去る事遠き事かくの如き狀勢であれば惠民倉が長續きしなかつたのは當然の事と言ふべきである。

この他富人は直接間接に惠民倉と利害が衝突したから、彼等の好意を得る事は困難であつたらう。又中産階級や、農村大衆並に極貧者に至つては無關心であつ

たと言ひ得るであらう。さうして貧民は假に全的賛成であつたとしても、彼等は政治上經濟上の力に於ては零に等しかつた。従つて社會面から惠民倉を見れば、その基礎たるべき官吏は全くたのみとならず、その恩恵に浴し得べき貧民は無力であつて、其他は白紙でなければ非好意的であつたのであるから、この點から見ても空中樓閣の傾向があつたと言ひ得る。

惠民倉は時代の兒であつたが、かゝる制度的社會的な根本的缺陷により、世に貢獻する事少くして天折した事は眞に惜しい事であると思ふ。しかもそれも「聞人は伶を觀、伶は人を觀る」の類であつて見れば、宋代社會の悲劇性の縮圖であると言ふべきであらうか。

(二六〇二・二・卅一日・於北京)

- ① 徐松の宋會要輯稿第一四七冊義倉の項にもこの文は收められて居る。唯徐松本ではこれを永樂大典一七五四一所收として居る。永樂大典目錄によれば卷一七五四一は貨の韻であつて、食貨二十六宋となつて居るから、これにも含まれて居たものと考へられる。この様に永樂大典には、同一記事を重複して掲出して居る事があるので、注意を要する。

なほ曾我部氏は玉海文獻通考を根據としてこの設置に

論及されて居る事を附記しておく。

- ② 大典引用文による。但※を附した點だけは大典に紐とあつたのを徐松本第一四七冊所收によつて訂した。なほ徐本にはこの他勅の方では彼を被に互を玄に誤り、詔の方では處置の置を脱し減價而出之の價を直に作つて居るが皆とらない。

玉海一八四淳化惠民倉所引の會要是節略文であるからとらない。これでは咸平三年として居るが、恐らくは魯魚の誤であらう。

- ③ これに關しては宋會要以外に二三の資料がある。續資治通鑑長編卷四五咸平二年十月の條

先是福建路不置惠民倉。庫部員外郎成肅以爲遠俗尤宜存撫。請增置焉。戊午詔從肅請

宋史卷一七六食貨志

庫部員外郎成肅請福建增置惠民倉。因詔諸路申淳化惠民之制(咸平中)

文獻通考卷廿一

眞宗咸平二年於福建置惠民倉

宋史卷六眞宗紀一(玉海卷一八四にはこれを引用)

咸平二年十月置福建路惠民倉

いづれも矛盾した記載なく、宋會要に次では長編が原史料に近いと思はれる。

- ④ 日比野丈夫氏「唐宋時代に於ける福建の開發」(東洋史研究三の四) 北山康夫氏「唐宋時代に於ける福建省の開發に關する一考察」(史林廿四の三)

⑤ 文献通考卷廿二にこれと同文がある。※を附した詔の字は宋史になく、通考によつて補つたものである。なほ通考では皆を並に作つて居る。

⑥ 曾我部氏の前掲論文の二義倉の項参照。

⑦ この記録は必ずしも北宋にのみついて言つて居るのではない。然し宋史のこの項下に含まれた史料は全部北宋に關するもののみであるから、この序も又北宋に關するものと言はねばならぬ。内容的に言つても南宋の惠民倉は、この記述とはかなり相違するのに反し、前記の國史所引の咸平の制度と一致する事も又充分考慮に價する點であらう。

⑧ 永樂大典に南昌府志として引用して居るのであるが、それが明史地理志二に出づる盧廷撰に相當するか否か定かでない。因に中國地方志綜録では萬曆十六年范涑撰を最古とするのであつて、いづれにしても明初地志の佚文たる事は疑ない。

⑨ 延平志は直齋書錄解題卷八に「郡守新安胡舜舉汝士與郡人廖棋挺哀集時紹興庚辰也、序云……」なる一部が收められて居る。然し乍ら永樂大典所引のものは此所に見得る様に端平の年號を含んで居るから、勿論この本ではなく、その續集に係るものであらう。なほ永樂大典卷七五一四平糶倉所收の文も嘉定の年號を含み、南宋末に於て編せられたと想像される。

⑩ 辛巳泣斷録は、四庫全書總目には浙江吳玉壻家藏本が存目に收められ、又邵亭知見傳本書目にも昭文張氏有舊

抄本と見えて居るのであるが、その印本はない様である。此所には永樂大典から引用した。

⑪ 戊申修史傳は四明叢書本「戊申修史稿」によつた。これは抱經樓舊藏四明文獻考にある稿本によつたとの事であるが、その文章は大典所引のものと全く同文である。なほ潭州の眞德秀の倉は曾我部氏も宋史の傳を引いてその存在に言及されて居る。

⑫ 曾我部氏は「玉圻、續文獻通考卅一」によるに、理宗紹定元年八月、資政殿學士知潭州曾從龍の奏請に従つて、潭州十縣に惠民倉を置き、令佐に委して糶米せしめた事見ゆ（頁五七）と言はれて居る。この潭州十縣が誤であると思はれるが、それは後に考證するであらう。

⑬ 涑江志も各種書目に共に見出し得ない所である。大典より引用した。

⑭ この「外十縣」が、長沙善化以外の十縣を意味する事は後述する。

⑮ 攸縣志も亦不明の書で、大典の佚文を利用した。

⑯ 新定續志は直齋書錄解題卷八新定志の説明中に「又淳熙甲辰陳公亮重修」と見える。然し永樂大典卷七五一四平糶倉所引の續志には淳祐・寶祐の年號を含んで居り、従つてそれは「三修」本に係ると思はれるが、この大典七五一三所收の文も亦同様であると思はれる。

⑰ 鄧雲特氏中國救荒史頁四五三

⑱ 曾我部氏前出頁五六及五七

⑲ 桑原博士「歷史上より見たる南北支那」（白鳥博士還曆

記念東洋史論叢 加藤博士「宋代の都市發達について」  
 (桑原博士還暦記念東洋史論叢) 同「南宋の首都臨安の人口」(社會經濟史學三卷八號) 那波博士「支那に於ける都市の守護神について」(支那學七卷三・四號) 參看

(20) 宋代役法上より觀たる鄆州廢置問題(東洋史研究五卷一號)

(21) この「邑」が城市を意味する事は、第二節の潭州の項中に於て、十二邑十邑に就て考證した所である。現在に於ても、中國に於ては城壁を以て圍まれた町を指して言ふのである。

(22) 北宋にも社會はなくはなかつたが、全く言ふに足りない。南宋になつて紹興以來各地に陸續として興された。社會は朱熹によつて創設されたと言ふのは全くいはれの無い事である。

(23) 王安石の萬言書即ち上仁宗皇帝言事書(王安石文集卷一)にこの點を痛論して居る。その一節に曰く

朝廷一令下、其意雖善、在位者猶不能推行。使膏澤加於民、而吏輒緣之爲姦、以擾百姓……  
 以下その所以を力説して居る。安石は亦「擬上殿劄子」(同卷三)に於てもこれを極力主張して居る。

附記 本論は私の北京留學中になした宋代倉制研究の一部である。留學に關し援助を頂いた外務省文化事業部廣島文理大及國立北京圖書館に對し深厚なる感謝を捧げる次第である。